



つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 396号 2011.5.29 発行 社会政策研究所

映画「プリンセス・トヨトミ」特集です。【kobi】

7月8日金曜日、午後4時——大阪が全停止した。遡ること4日前の月曜日。東京から大阪に3人の会計検査院調査官がやって来た。税金の無駄遣いを許さず、調査対象を徹底的に追い詰め“鬼の松平”として怖れられている松平元(堤真一)。その部下で、天性の勘で大きな仕事をやってのけ“ミラクル鳥居”と呼ばれている鳥居忠子(綾瀬はるか)、日仏のハーフでクールな新人エリート調査官、旭ゲーンズブルー(岡田将生)。彼らは順調に大阪での実地調査を進め、次の調査団体のある空堀商店街を訪れる。その商店街には、ちょっと変わった少年少女がいた。お好み焼き屋「太閤」を営む真田幸一(中井貴一)と竹子(和久井映見)夫婦の一人息子・真田大輔(森永悠希)は、女の子になりたいという悩みを抱えていた。その幼馴染・橋場茶子(沢木ルカ)は、大輔とは対照的に男勝りでいつも大輔を守っていた。そんな商店街を訪れた調査員一行は、財団法人「OJO(大阪城跡整備機構)」に不信な点を感じる。だが、徹底的な調査を重ねるも、経理担当の長曾我部(笹野高史)にのりくらりとかわされ、諦め始めた鳥居も「これでOJOが嘘をついているとしたら、大阪中が口裏を合わせていることになりますよ」と不満をもらす。そのとき、松平の脳裏にある考えが閃いた。「そうだ、大阪の全ての人間が口裏を合わせている……」意を決して再びOJOを訪れた松平の前に現れたのは、お好み焼き屋「太閤」の主人・真田幸一。そして「私は大阪国総理大臣、真田幸一です」と発せられたその言葉に松平は耳を疑った……。

プリンセス・トヨトミ 【著】万城目学

【評者】瀧井朝世 (ライター)

朝日新聞 2010年5月8日

著者：万城目学 出版社：文藝春秋 価格：¥750

■大阪舞台に「人の心」の奇跡

大阪の町には、何か秘密がある——東京から来た会計検査院の調査官が気づいた小さな疑惑。その封印が解かれた時、西の大都市の機能が全停止した！

荒唐無稽なホラ話をユーモラスに描く著者が、生まれ故郷を舞台に選んだエンターテインメント。28日に映画化作品が公開されることでも話題となっており、4月刊行の文庫版は初版20万部、すでに3度の大増刷。「著作が次々と映像化されるなど、ここ2年間ほどで著者の知名度が上がったことも人気の理由では。映画製作サイド、大阪を中心とした多くの書店も原作を熱心に宣伝してくださっていてありがたいです」と、担当編集者の八馬祉子(はちうまよしこ)さん。



日常の中に異質なものが紛れ込む、というユニークな設定が著者作品の大きな魅力だ。「ファンタジーにもSFにも分類できない“万城目作品”というジャンルが出来上がっています。歴史の深い知識がベースにあるので時代小説・歴史小説好きにもたまらないと思います」。特に本書はこれまでの長編とは違い、異世界の要素はまったくないのが特徴的。豊臣秀吉や大阪城の史実に基づきつつ、人々の地元愛、親子の絆といった「人の心」が起す奇跡が描かれている。

文庫の特典は巻末の著者自身によるエッセー。大阪城や空堀商店街の思い出、豊臣秀吉に対するこだわり、建築家・辰野金吾の情報など今作品ゆかりの事柄が楽しく語られており、これを片手に町歩きがしたくなる。

読者層は老若男女、偏りが無い。大阪はもちろん全国的に売れ行きは好調。関西出身ではない読者からは「自分が住んでいる地域にもこんなことがあったらいいな、と想像しました」という感想も。魔法なんて使わなくとも、人々が一致団結すればこんなに大きなことができる。そんな夢を見させてくれる、笑えて熱い小説である。

映画「プリンセス・トヨトミ」 大阪城天守閣で写真展

大阪日日新聞 2011年5月8日

「プリンセス・トヨトミ」の宣伝ポスターや撮影写真に見る大阪城の来訪者＝6日午後、大阪市中央区

28日公開の映画「プリンセス・トヨトミ」のロケ地となった大阪市中央区の大阪城天守閣で、映画のシーンやロケの風景を収めた写真約20枚が展示され、来館者の目を楽しませている。6月30日まで。



大阪市博物館協会大阪城天守閣によると、天守閣2階に設けた展示場を見物した女性客から「ちょっと面白そうやね」との声も上がり、評判は上々。

11日には天守閣3階展示室で、城主の秀吉が豊臣家の将来を託そうとした養子や実子の足跡と実像を探る「プリンス・豊臣」展も始める予定で、「映画の架空の世界と実際にあった現実の世界を楽しんで」と天守閣スタッフは来場を呼び掛けている。

「プリンセス・トヨトミ」は万城目学(まきめまなぶ)氏のベストセラー小説を映画化。大阪を舞台にした奇想天外な物語で、大阪府庁本館や空堀商店街などがロケ地になった。

5/28 (土) 映画「プリンセス トヨトミ」が公開！ 原作者・万城目学氏に直撃インタビュー

関西ウォーカー 2011年5月27日

「映画では綾瀬さん演じる鳥居がどんどんアホになっていくのが特にいいですね」

撮影＝サンペイ

会計検査院による調査をきっかけに、大阪全体で約400年もの間守られてきていた“ある秘密”が明らかになっていく様子を描いた映画「プリンセス トヨトミ」(5/28(土)よりTOHOシネマズ梅田ほかにて公開)。今回、本作の原作者である人気作家・万城目学(まきめまなぶ)氏が映画のこと、本作が生まれたきっかけ、さらに自身の地元でもある大阪への思いを語ってくれた。



—まず、完成した映画作品をご覧になっての感想を教えてください。

「自分が作った物語ですが、ストーリーの減茶苦茶さに自分でもびっくりしました(笑)。映

画化のお話をいただいた時も、一流の俳優さんたちがそれを演じてくれるなんて、“本当にいいのかな!?”という気持ちでしたね(笑)」

—そもそも、この奇想天外な物語が誕生するきっかけは何だったんでしょうか？

「『鴨川ホルモー』では京都、『鹿男あをによし』では奈良を舞台に書きましたが、僕は大阪出身なのでやっぱり大阪を題材にする時は、一番大きなスケールの物語にしようと思っていたんです。地元だけに“もっともっとおもしろくしたい!”と思ううちに、どんどんと物語が膨らんでいきました。いま、僕は東京に住んでいるんですが、望郷の念が生まれるんですよね。きっといまも大阪に住んでいたなら『プリンセス・トヨトミ』は書かなかっただけでしょうし、離れているからこそ、その想いが募って筆を走らせたんだと思います」

—それで、大阪国という国家が存在し、大阪の“ある秘密”の鍵をにぎるのが豊臣家の末裔だという歴史的なホラ話と融合させようとして…。

「『鴨川ホルモー』の時もそうでしたが、ホラ話をくっつけるというのは大阪を舞台にした作品でもやってみようと思っていたんです。それでいくつか大阪にまつわるキーワードを挙げていったら、大阪城とか大阪人の気質というものが出てきて。カタチのあるものとそうでないものを1つのエンタテインメントで結び付けることも最初の段階で考えていたので、そこからいろんな要素を足していきましたね」

—奇想天外な物語の中にも、きちんと親と子の絆だったり人間ドラマも描かれていますね。

「人情的な話を書くために、最初から父と子の話にしようと思っていた。そこに大阪の男たちを集結させるための“大阪国”という存在を描いたんです。書いている時は、かなり綱渡り状態で“本当に目指す結末にたどり着けるのか?”って不安になったりしましたけど(笑)」

—大阪人にとってはすごく思い入れのある原作であり、映画にもなりました。

「梅田とか大阪府庁・大阪城周辺のメジャーな場所だけでなく、大阪人ならすぐわかる、天王寺の路面電車が走る一瞬が映っていたりもするので、大阪人は数倍楽しめる作品だと思います」【取材・文＝リワークス】

【MOVIE】「プリンセス トヨトミ」

監督：鈴木雅之 原作：万城目学 出演：堤真一 綾瀬はるか 岡田将生 中井貴一 沢木ルカ 森永悠希 笹野高史 和久井映見

(’11 東宝) 上映時間：119分

※5/28(土)より TOHO シネマズ梅田ほかにて公開

公式サイト：<http://www.princess-toyotomi.com/>

たまには太陽の子・手をつなぐ、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック



大阪市天王寺区生玉前町 5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行